

「カットイメージ読解法」の研究（8）

— 都民向け公開講座受講者による体験報告のKJ法整理 —

山崎 茂雄

（東京都立桐ヶ丘高等学校）

1) 研究の背景

「カットイメージ読解法」は、小説の内容を順に画（視覚イメージ）として思い浮かべて本文を区切り、それを理解単位として読解を進めていく、筆者が創案した学習・教授法である。山崎（2015『読書科学』）では、その効果として詳細なイメージ化が人物への感情移入を強め、プロット理解を促進するというメカニズムが示唆された。

2) 方法

筆者は、この方法を広く伝えるため、数年前から一般都民を対象に、都立学校公開講座（東京都教育委員会主催）として、「カットイメージ読解法入門」を開催している。毎週土曜2時間半の4回講座を、年1～2度開講する。

初回でカットイメージ読解法の基本的やり方を練習したのち、第2、3回はその場で読み切れる短編小説についてカットイメージ作業をしてカット分けの異同や内容についての意見を交流する。第4回は短編小説を事前に配布してカットイメージ作業を自宅課題とし、話し合いに時間を割く。

受講定員は15名だが、実際に受講し、修了まで継続するのは4～9名である。毎回、講座のふり返りを自宅で書き、次回提出する。第4回では、最終アンケートに回答する。これらの自由記述を研究対象とした。

2016～18年に開講した5講座の受講生延べ30人から有効回答が得られた。男女比はほぼ同率、年齢は20代～70代だが、27人は50代以上である。回答の中から、カットイメージ読解法に関する体験・実感などの記述を抽出した。一文に複数の内

容を含む場合はセンテンスを分けた。その結果、80個の報告が得られた。

これらを元データとし、KJ法によるまとめを行った。作業にはPCソフト「ウルトラプレゼン」（ITEC社）を用いた。川喜田二郎『KJ法～混沌をして語らしめる』の手順に従い、個々のデータの“志”（示唆する意味）を意識して、データを少しずつグルーピングし見出しをつける作業をボトムアップで丁寧に積み重ねた。4段階目で6つの島にまとまったので、図解配置した。上位2段階までの見出しでまとめた図解をFig. 1に示す。

3) 結果と考察

Fig. 1によれば「気づきを通してイメージが鮮明になり、楽しく、深く読める」のが、①カットイメージの体験である。それを前提にした②話し合いは、「読みが深まり、視野が広がり、交流自体が楽しい」ので、「時間があっという間に過ぎる」。その結果、「読むプロセス自体が楽しく、理解・味わいが深まり、もっと広く、深く読みたくなる」という③読書の質的な変化や、「脳が目覚め、心が豊かになり、ものの見方が変わり、能力の発揮にもつながる」という④さまざまな実感・波及効果が報告されている。また、くり返し受講すれば、「コツがつかめた」と「習熟する実感」がある。

この分析により、講座の中での受講者たちの体験の様相が明らかになり、カットイメージ読解法がもたらす可能性のある効果が鳥瞰できた。これらは同読解法開発のねらいや山崎（2015）の結果とも合致している。これらの効果をより確かなものにするために、開発・実践を続けたい。

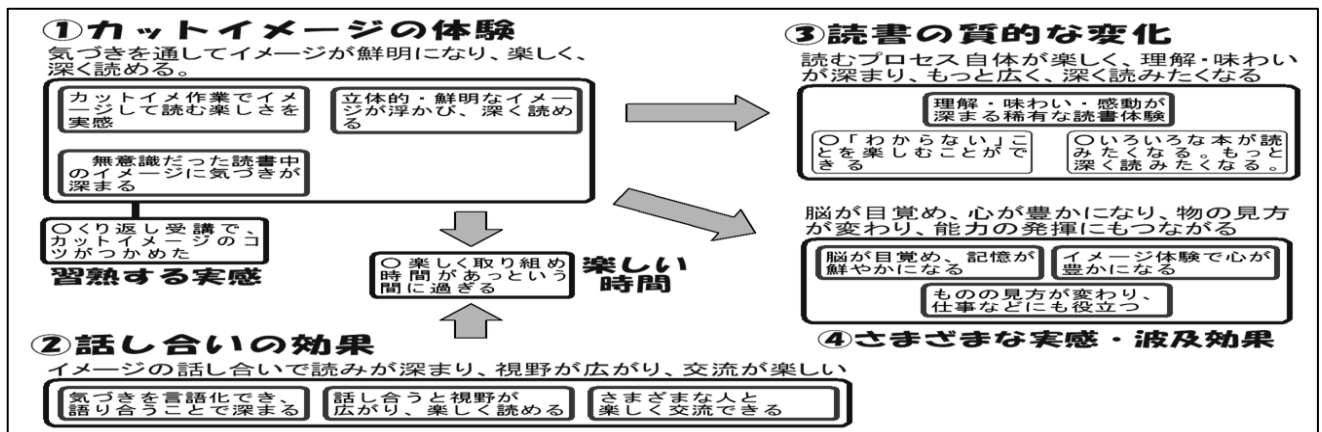


Fig. 1 カットイメージ読解法入門講座における受講者の体験・実感